

Title	古版経済書解題 ジョン・グレー著一千八百四十八年版 貨幣の本質及び効用に関する講義
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.12 (1938. 12) ,p.1709(123)- 1719(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19381201-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381201-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

ジョン・グレー著一千八百四十八年版『貨幣の本質及び效用に關する講義』

高橋誠一郎

國家社會主義の開路者と看做さるゝジョン・グレー(John Gray)は一千七百九十九年に生れ、凡そ一千八百五十年の頃に歿したるが如くである。彼れは原と蘇蘭土の出であるが、五ヶ年の少年時代をダービィシヤのレプトン校に於いて送つたやうに見える。此處に彼れは希臘語及び羅典語に熟達するの好機會を有して居つたに拘らず、子供らしい遊戯にのみ耽つて居つた、と彼れ自ら談つて居る。彼れは十四歳にしてレプトンを去つて倫敦に赴き、チーフサイドの卸商店の丁稚と爲り、次いで得意先を廻りと爲つた。此の大都會は彼れの上に其の呪文を投げ掛けた。恰もナポレオン戰役の終止によつて未曾有の混亂と窮厄の時代が開始せられた際に青年と爲つた彼れは、其の周圍に於いて看出さるゝ無秩序と衝突とは國家的權威の強大なる力によつてのみ惟り調和と平和とに融合せしめられ得べきことを確信するに至つた。彼れは「人類の商的行動は自然の全體系と矛盾するものであり、而して神は斷じて其の被造物を、余が余の蹈む一歩毎に彼れ等を目撃するが如く、相互の邪魔物に過ぎざるものたる可く意圖すること

はあり得なかつた」と考ふるに至つたのである。(John Gray, *The Social System*, 1831, p. 338.)

彼れの業務は次第に繁榮に赴いたのであるが、而も彼れは其の若き日に始まつた社會の諸害惡に就いて黙想するの風を長く廢することがなかつた。彼れは一千八百十五年、オーエンの運動に引き込まれ、オリーブストンに於けるローム (Abram Combe) のオーエン主義的共產團體の經營に助力するが爲めに蘇蘭士に赴いた。然も、彼れは幾許ならずして這般の企圖を抛棄し、一千八百二十六年、*A Word of Advice to the Orbistomians* と題して此の植民地の批評を公にし、雜多なる個人の聚合を、恰も彼れ等がオーエン主義的計畫の理想的環境中に訓練せられて來たかの如くに統治するの舉から必然生ぜざるを得ざる諸困難を論評した。彼れは蘇蘭士に殘留し、種々なる新聞及び廣告業に従事し、或る程度の成功を贏ち得たるが如くである。蓋し、彼れは其の晩年に於いて多額の褒賞を提供し、且つ無代を以つて其の著書を多數流布せしめたるの事實存するが爲めである。(Esther Lowenthal, *The Ricardian Socialists*, 1911, pp. 47-48; Anton Menger, *The Right to the Whole Produce of Labour. The origin and development of the theory of labour's claim to the whole product of industry*, trans. by M. E. Tanner, with an introduction and bibliography by H. S. Foxwell, 1899, p. xlix.)

二

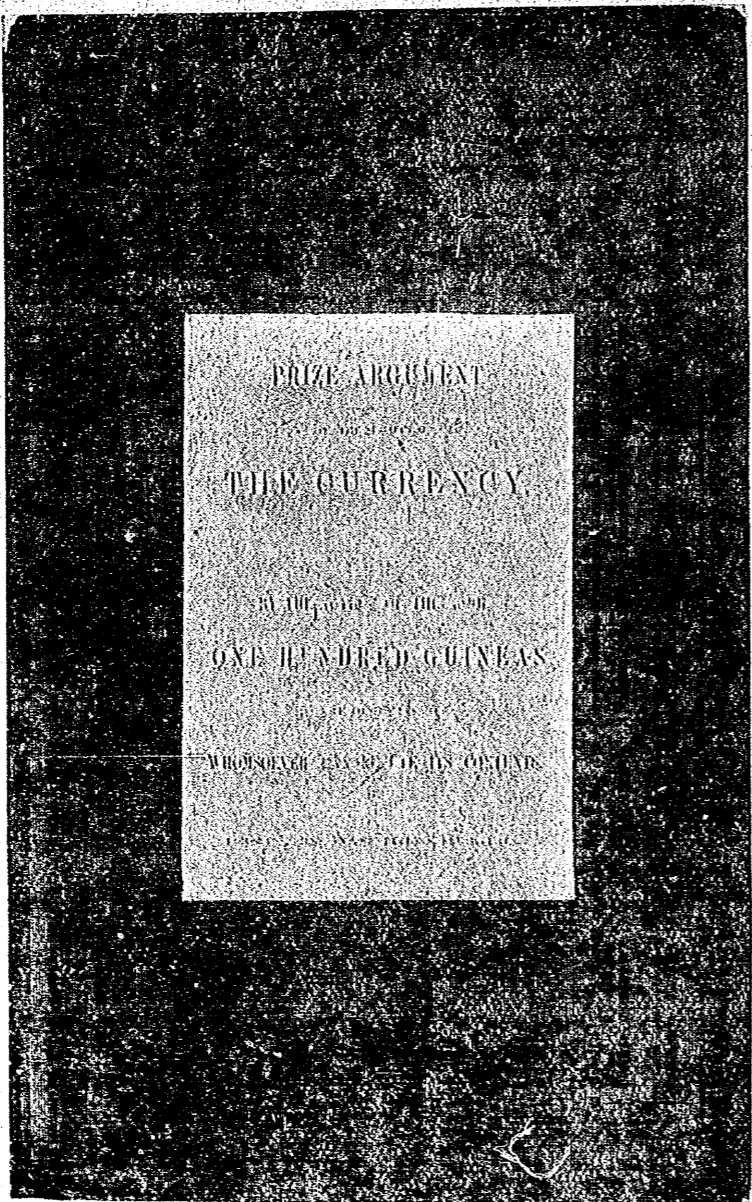
倫敦と其の無数の人口とによつて提供せらるゝ問題は、グレイに取つては、多年の間、彼れが永く解決し得るの希望を殆んど全く抱くことを得なかつた程、入り組んで居つた。而も、彼れは其の觀察と默思の最後の結果として次ぎの如き結論に到達した。余は、あらゆる種類の財貨は是れ等のものが註文せらるゝが爲めか、若しくは註文せらるゝあらゆる見込存するが爲めか、孰れかに由つて造らるゝことを明確に知つた、而して不斷の省察は余をして

斯くの如き事態は須らく顛倒せられなければならぬこと——生産は需要の結果ではなくして、須らく之れが原因でなければならぬことを納得せしめた」と。(Social System, op. cit., p. 340.) 彼れは其の發見に満足して「イタム・スミスの著に向ひ、『國富論』の第一卷を読み、而して後、「激烈にして稚氣滿々、不可解にして修正し難き一卷を編纂し」、之れを *The National Commercial System* と呼んだ。彼れは他人の忠告を容れて、此の書を上梓することを思ひ止つた。其の後、其の兄弟に勧められてオーエンの諸著を読み、是れ等のものゝ中に幾分自己の意見を支持するものあるを看出し、一千八百二十五年其の抛棄せる著作の一斷片を *A Lecture on Human Happiness, being the first of a series of lectures on that subject in which will be comprehended a general review of the causes of the existing evils of society and a development of means by which they may be permanently and effectually removed.* と題して倫敦に於いて出版した。此の倫敦版の一部は失はれて、英國内に流布することが少なかつたのであるが、ヒラベルヒヤに於ける其の覆刻は忽ちして一千部を賣り盡し、米國に於ける社會主義的團體の發達に資する所があつた。(Foxwell, op. cit., pp. xlviii-xlix.) 本書はゲオルク・アドラー (Georg Adler) 監修 *Hauptwerke des Sozialismus und der Sozialpolitik* の第八巻としてフランクフルン (A. M. Freund) によりて獨譯せられ、*Vom Menschlichen Glück.* と題して一千九百〇七年ライプツヒヒに於いて出版せられてゐる。尙ほ本書原版は一千九百三十一年に覆刻せられてゐる。

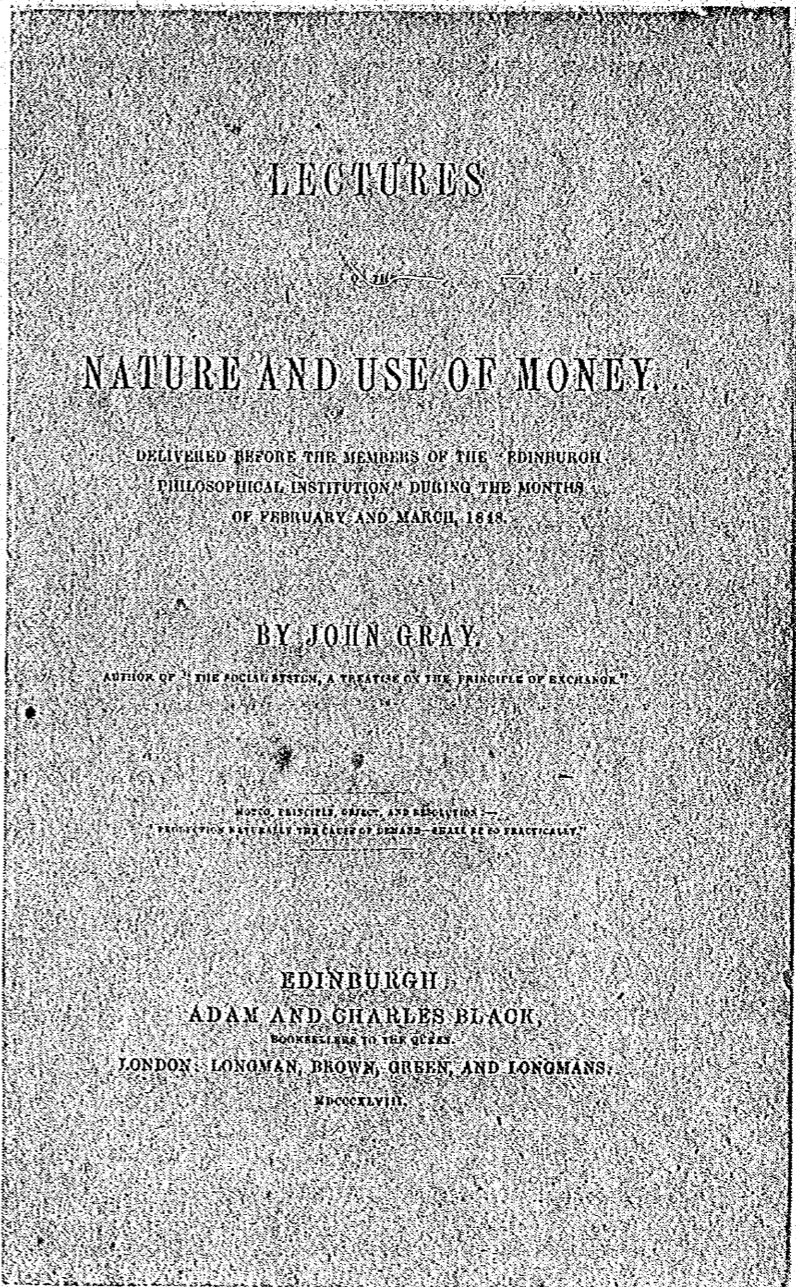
ゾーナーは此の書に於いて一千八百十四年版コクホーン (Patrick Colquhoun) の著 *A Treatise on the Population, Wealth, Power and Resources of the British Empire in every quarter of the world.* に掲げられた數字を基礎として、労働は其の収益の五分の四を劫掠せらるゝこと、並びに峻酷且つ普遍なる競争によつて加重せられた資本の

利益に資する不平等なる交換は有效需要の制限に終らざるを得ずして、是れが爲めに又、生産は限定せられ、攪亂せられざるを得ざることを立證せんと努めたのである。雇主、大小商人、醫師、藝術家、科學者は非生産的である。尤も、其の或る者は爾餘の者が不生産的にして又、無用なるに反し、有用なるものではあるが、而も、有用なる者も無用の者と等しく、田圃、工場及び鑛坑に於ける賃銀労働によつて生産せられた富に衣食する。一千八百十二年には合衆王國の人口は一千七百〇九萬六千八百〇三人を數へ、生産せられた新たな富は四億三千〇五十二萬一千三百七十二磅に相當する。斯くの如き富は七百八十九萬七千五百三十一人の労働者の生産する所であつて、是れ等生産階級の男女及び兒童は平等なる交換の原理に従へば、年々各々五十四磅を收受す可き筈であるに拘らず、彼等は事實上僅かに十一磅、即ち自己の労働收益の五分の一を極めて僅かに超過せる高を收受するに過ぎない。換言すれば、約八百萬の生産者は九千〇五十磅を收受し、九百萬の非生産者は三億四千萬磅を收受するのである。彼れ曰く、「即ち、事實上、一切の物を支拂ふ貧民が何物をも收受せざるに、事實上、何物をも支拂ふことのない富者が一切の物を收受する。斯くの如き社會状態が當さに保存せらる可きであるか如何かを吾人はあらゆる公平なる人々の判断に委する」と。(ibid., ed. 1825, pp. 15-20)。社會のあらゆる不生産的人員は生産階級に對する直接税である。彼れに従へば、總べての財産の基礎は労働であつて、之れに對する何等他の公正なる基礎も存することがないのである。(ibid., p. 34)。

斯くて初め共產主義的組織に解決を求めんとするの傾向を有して居つたグレイは、終に、社會的災害の淵源が生産の私的管理に存せずして、競争的個人主義的賣買の方法並びに金若しくはあらゆる他の交換媒介物の内在的價値の推定に存することを信ずる改革家に與するに至つた。即ち一千八百三十一年を以つてエジンバァロオに於いて出



(圖 一 第)



(圖 二 第)

版せられた其の The Social System. A Treatise on the Principle of Exchange. に於ては、總べての財貨は生産者等によつて國立倉庫に交付せらる可く、而して生産者等は順次に國立銀行によつて信用を附與せられたる生産者に對して發行せられた紙幣に對して商業會議所によつて決定せられた價格に於いて他の財貨を收受す可き賣買の國家管理を主張したのである。本書は一千八百四十二年に再版せられてゐる。グレイは一千八百四十二年、エジンバラオ及び倫敦に於て An Efficient Remedy for the Distress of Nations. を出版し、次いで同四十七年同じく兩地に於て The Currency Question. を上梓した。而して彼れは纏がて其の翌四十八年、吾人が茲に紹介せんとする Lectures on the Nature and Use of Money, delivered before the members of the "Edinburgh Philosophical Institution" during the months of February and March, 1848. をエジンバラオに於て印刷し、一千二百部を限定して無代を以つて江湖に配付し、何人たるとを問はず、其の内容を論破し得たる者に對しては一百ギニーの褒賞を與ふ可き旨を記せる紙片を其の表紙に貼附した。茲に右懸賞の要旨を記せる紙片が比較的良く保存せられてゐる私蔵本の表紙(第一圖)と、其の扉(第二圖)とを寫眞版として掲げることとした。

三

グレイの標語であり、原理であり、對象であり、又、解決である所のものは、「生産は本來需要の原因である」と云ふことを實際に於いて然らしむ可きである」と云ふに在る。凡そ如何なる貨幣制度の存在によつても影響せらるゝことのない完全に自由なる社會状態に於いては、供給と需要とは交換し得る名辭であつて、供給は需要であり、需要は供給である。斯くて「總體的過剰生産」、即ち市場に於いて賣買せらるゝ産物が供給過多の状態に陥ることは、一言にして言へば「不可能」なる可きである。(Ibid., p. 30.)。財貨に對する財貨の「交換」(interchange)即ち物々交

換の行はるゝ所、是れ等財貨の如何なる物と雖も、あらゆる他の物の價值の一般に認められた尺度たることのない所に於いては、生産は無窮に需要の「自然的」原因である。著者を以つて觀れば、ジェームズ・ミル及びジェ・アール・マカロック等が、生産は現存貨幣制度の下に於いて無窮に需要の原因であることを主張するは誤である。(昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷四二一—四頁参照)。眞理はそれが現在に於いて然るに存せずして、當さに然らざる可らざるに存する。(Ibid., p. 31)。而して彼れの意見に據れば、「財貨が相互に對して適當の割合に於いて市場に齎され、而して貨幣の如きものが未だ全然存在することがないと想像せらるゝならば、總體に於いて、財貨を賣却するは之れを購入すると等しく容易なる可きであり、而して需要及び供給なる語は正さに同一物に對する二個の名稱たる可きである」。(Ibid., p. 35)。斯くて這般の狀況に在つては、「過剰生産」の存在は明かに不可能なる可きである。疑ひもなく、不均衡なる生産は存することがあるであらうが、而も斯くの如きは、經濟學者の替罪羊(古猶太の牧師が其の頭に人民の罪を負はしめて荒野に放ちたる山羊)的語法に於ける、極めて急速に其れ自體を匡正す可き禍害であつて、總體的過剰生産は斷じて存することを得ない。(Ibid., p. 57)。完全に均衡の取れたあらゆる市場に於ては、總べての物品は買はれ又賣らる可きである。(Ibid., p. 250)。

生産は需要の自然的原因であると云ふ大原則は今や現存貨幣制度の作用により其の關係を顛倒せられて、生産は需要の結果と爲つた。蓋し、一の有價值物件は如何にしても綜合せられた總べての他の有價值物件と等しく速かに隨意増加せらるゝこと能はざるが故に、苟も測定せらる可き諸貨物が、尺度其の者よりも(之れを使用する方法が依然として變化なきものとして)速かに増加する際には、物價は下落しなければならず、又、生産は停止す可きである。自然的のものから對別せられた這般の價格下落は、大不列顛、佛蘭西、亞米利加及び誤つて文明國と呼ばれ

た世界に於けるあらゆる他の國に於ける生産に對する現存の限界である。(Ibid., p. 250)。

是に於いて乎、斯くの如く狂氣的に停止せられた此の大原則の作用は其の勢力を復活せしめられ、而して吾人の商的事務の總べては之れが支配と統治に服従せしめられなければならぬ。然も、如何にして之れを遂行す可きであるか。物價下落の時代はグレーが其の生涯を終る頃まで續いた。ナポレオン戦役後に始つた縮少と業務不振の時期は一千八百四十九年以後に於ける新たな金の供給が物價に上昇的傾向を與ふるまでは遂に終止しなかつた。生産は需要によつて限定せらるゝと云ふグレーの有名なる絶叫は斯くの如き時期の特徴たる躊躇逡巡小心翼翼たる營業方法を述べたものである。(Lowenthal, op. cit., p. 58)。

而して彼れを以つて觀れば、彼れの國家が現在惱されつゝある、仕事の缺乏若しくは労働が充分なる報酬を受くことなきの事實より發せる殆んど總べての害惡を絶滅せしむるが爲めには、吾人は唯だ二つのものを要するのみである。第一は銀行の仕組であり、第二は價值の眞尺度である。(Gray, Money, p. 108)。即ち彼れは何等の社會改造をも要求するものではない、欲望せらるゝ總べては、少數の有益なる貨幣法規である、と自ら考ふるに至つたのである。(Ibid., p. 90)。即ち第一に、現在に於いては需要の結果たる生産をして其の原因たらしむるが爲めには倫敦、エジンバァロオ及びダブリンに各々一個の「標準銀行」(a standard bank)を設立し、英蘭土全土、蘇蘭土全土及び愛蘭土全土に其の支店を有せしむ可きである。(Ibid., p. 110)。這般の本位銀行の業務は、其の數量が創造せられたる總べての價值の高に等しからしめらるゝを得る代表紙幣を發行するに存する。

グレーは其の前著以來、貨幣が内在的に有價值なる可きでないことを主張した。彼れの提唱する國立銀行は有給理事の團體によつて管理せらる可きである。彼れ等は其の社會の財産の一般的保管を行ひ、諸工場が如何なる物品

を、如何なる數量に於いて生産す可きかを決定す可きである。各工場を預る製造業主は自己の労働者を選択するの力と共に監督の義務を有す可きである。總べての財貨は其の夫々の製造所及び仕事場から國立倉庫に送達せられ、此處に其の直接費用即ち費された原料及び労働の價格は確められ、而して商業會議所によつて決定せられた一定の歩合若しくは利潤は地代、利子、資本の減價、事故及び租税等の種々なる経費を支拂ふが爲めに附加せらる可きである。斯くの如きものが財貨の小賣値段を形成す可きである。其の完成せる産物を公共の倉庫に預託した製造業主は労働時間を以つて計算せられた其の全價值を紙幣を以つて銀行より受理す可きである。而して、同銀行は何人によるとを問はず、前記の財貨が該倉庫より撤去せらるゝに際して、最も不變なる方法に於いて前記の貨幣の返還を要求する。斯くて貨幣の高は常に財貨に對して正確なる均衡に於いて存す可きである。生産者等は彼れ等の財貨に對する貨幣價值の正確なる高を取得し、而して之れと交換に該倉庫から其の必要とす可きあらゆる財貨を取得し得可きである。(M. Beer, A History of British Socialism, vol. I, 1920, p. 218; Lowenthal, op. cit., p. 59.)

グレイは其の『貨幣講義』中に於いて「人間の労働」が同時に價値の泉源であり、標準であり、而して又唯一可能な「尺度」であることを主張し、而して之れを「偉大なる蘇國人」アダム・スミスの權威に訴へる。(Ibid., p. 155.) 彼れは更らに進んで、現存貨幣原理の過誤を指摘し、眞貨幣原理を説明し論證する。彼れの意見に據れば、貨幣の本質、效用及び適當なる性質はジョン・ラッセル卿、サー・ロバート・ピール、コンデン、『タイムズ』紙の記者によつて、「一般操觚者によつて、又兩院議員によつて全然誤解せられてゐる。(Ibid., p. 251.)」

四

グレイは初め競争を以つて貧困及び不正の主たる原因として烈しく之れを非難したのであるが、其の後其の意見

變じて之れを貨幣制度に置くに至つたのである。彼れは本『貨幣の本質及び效用に關する講義』が英國に於いて出版せらるゝに先き立ち、新聞紙を通じて逸速く、其の一部を革命後の佛國假政府に送付せんことを申し込んだのであるが、而も彼れは此の申出に對して何等の返辭をも受けることがなかつた旨を自ら記してゐる。(Ibid., p. 247, and Appendix.)